

第 21 回大雪山国立公園フォーラム「大雪山の登山道を守るしくみを考えよう」
山樂舎 BEAR 登山体系講座「自分の山は自分で守る」【結果概要】

1. 概要

日 時：平成 28 年 7 月 10 日（日）14:00～17:00
場 所：旭川市民文化会館 第 2 会議室
主 催：大雪山国立公園連絡協議会・山樂舎 BEAR
参加者：31 名

2. 内容

(1) 山樂舎 BEAR 代表 佐久間弘氏「大雪山国立公園における登山道の維持管理」

- ・行政による維持管理には、管理者がわかりにくい、担当者が替わり長期的な視野での対応が困難、迅速な対応が難しい、施工方法が自然的ではない等の問題点がある。
- ・登山道の維持管理の長期的指針となる大雪山グレードに基づき、民間主導の維持管理体制構築が必要。

(2) NPO 法人信越トレイルクラブ理事 木村宏氏「信越トレイルにおける登山道の維持管理」

- ・信越トレイルクラブは、理事会、事務局、整備専門スタッフ、会員 250 名、検討委員会等で構成。事務局は、行政を含む信越トレイル連絡会の運営も行う。
- ・事務局が管理主体として次の業務を実施。①関係者の連絡調整、②管理体制の確立（整備や維持管理のマニュアル）、③ガイド組織のネットワーク確立、④情報収集と発信、⑤継続した活動。事務局は飯山市観光協会におき、その職員が NPO の業務を実施。
- ・整備や維持管理を実施する主体が、マニュアルに基づいて、事前に実施の計画を事務局に提出して、関係機関における手続きの必要正等を判断する体制が整えられている。
- ・5 年くらい前に東川町で講演したときに比べると、山岳関係者による情報交換会が開催される等の進展があったが、大雪山国立公園には、管理主体となるヘッドクォーターの未確立である点は変わっていない。急務である。

(3) パネルディスカッション（司会：北海道大学大学院 愛甲准教授）

- ・上川自然保護官事務所の柵から、みちのく潮風トレイル、磐梯朝日国立公園の事例を紹介。
- ・その後、主に、愛甲准教授から木村氏に対して、信越トレイルの状況（組織体制、維持管理の参加者の拡大等）をさらに、詳しく聞くような形で、話が進む。
- ・議論の結果、維持管理に関わる民間の団体のコーディネート業務を、どこを拠点として行うのか、誰が行うのか、資金をどのように調達するかという点が課題であることは明確であり、人材面・予算面で持続可能な仕組み作りが必要という認識で一致。
- ・愛甲准教授から、誰が次の一步を踏み出すのかが重要であること、木村氏からは、多くの関係者をコーディネートすることにおもしろさを感じる人、熱い思いを持つ人、一つのことにのめり込む人ではなく多角的な視野を持つ人、多くの人間とつきあうことができる人がこの仕事をする上では重要とのコメントがあった。